

ホームカミングデイ見学行事報告 2 (谷崎潤一郎旧邸・石村邸の見学)



谷崎潤一郎氏が数多くの名作を世に出した京都の拠点となったのがこの場所で、後に川端康成氏もこの地で名作を残しています。

非公開の施設ですが、矢ヶ崎先生の特別のはからいでホームカミングデイ行事として、今回見学ができました。左記はその際の記念写真です。(2班に分かれた中の1つの班です) 詳細に説明を頂き、たくさんエピソード、歴史、美術、文化資産として貴重なお話を承りました。作成頂きました資料は、本学の研究資料から抜粋して作成頂き、細部にわたり、詳細で、他に見ることのないもので、たいへん興味深く、全文を添付致します。

石村亭の建築

1、建築の概要

京都市左京区下鴨泉川町五番地、高野川と賀茂川の合流点の北、下鴨神社とその摂社・河合神社の社叢である糺の森の東縁を南下して流れる泉川の左岸に旧谷崎潤一郎亭「後の孱媛邸」、現在の「石村亭」はある。敷地の150メートルほど東には下鴨東通りを挟んで高野川が南流しており、川岸からは大文字、如意ヶ岳をはじめとする東山連峰を望むことができる。現在、敷地の周辺には新しい住宅が立ち並んでおり、往時の環境を知ることは難しいが、住宅が立ち並ぶ以前は、敷地からも高野川対岸に東山連峰を望むことができたことが想像される。敷地の広さは約600坪(約2000平方メートル)である。

敷地の中央に池庭をつくり、北西に表門が開く。池の北方に主屋、南方に離れの書院が対面して建つ。また、池の南西方に、池に一部張り出すようにして茶室が建ち、茶室の東方に腰掛待合が付属する。洋館は池の芝生の中に建つ。離れ書院の東方に二階家があったが、現在は失われている。

表門と中門

表門は泉川沿いを走る前面道路に向けて西面して開く。二本の太い丸太柱に丸太の貫(冠木)を一本通しただけの冠木門の形式をとる。簡素でありながら風格を備えた表門である。

表門から自然石を打ち並べた延段が、まっすぐ東に向かってのび、途中で中門が開く。中門は切妻造草葺。絞り丸太を二本立てて棟木を支え、柱から前後に大きく出た腕木が丸太の桁を受ける。中貫も曲がりのある丸太である。柱に吊られた二枚の開き戸は、腰高の位置に格子の透かしを入れた板戸。数寄屋のたたずまいに相応しい瀟洒な小門である。左右には竹を木賊(とくさ)張りにした袖塀がとりついて風情を添えている。左右の柱には武者小路実篤筆になる聯がかかる。

中門を入ると、右手に小さな腰掛を構える。延段は腰掛を過ぎたあたりから、左にゆるく湾曲し主屋の玄関へと向かう。

主屋

木造平屋建、切妻造棧瓦葺で、軒先のみ銅板を葺く。屋根の棟を、玄関付近では東西に、主室付近では南北に配して変化をもたせ、切妻屋根を少しずつずらしながら幾重にも棟を重ねている。小さな屋根を組み合わせることによって、大きく重厚な屋根にならないように工夫されている。さらに軒先を銅板で葺くことで、軽快さがいっそう際立つ。特に、南向き東寄りの主室から次の間にかけての軒は、化粧垂木とは別に屋根裏に桔木を入れて補強し、3尺(91センチメートル)を超える非常に深い銅板葺きの軒をつくっている。いかにも数寄屋建築らしい、軽やかで陰影の深い軒下の情景である。

玄関は西を向いて開く、玄関先に建つのは見付6分(1.8センチメートル)ほどの細い組子を立てただけで、ガラスも障子も張らない、いたって簡素な格子戸である。玄関の奥行きは4尺(1.2メートル)ほどしかなく、そこに奥行き1尺6寸(48センチメートル)の式台がついている。式台は檼板4枚の目地に竹を挟み込んだもので、正面の舞良戸は舞良子を2本と3本を交互に吹き寄せているなど、意匠を凝らす。北面の壁際に置かれた靴箱は、節目の目立つ档丸太と網代の引き違い戸で構成されており、数寄屋の玄関に相応しい風情を添えている。式台と土間との段差を利用して下部に小袋棚を設けているのは機能的で無駄のない工夫である。小さな那智黒の玉石を敷き詰めた土間はまことに見事な仕事で目を惹く。決して広くはないが、書院造りの式台とは違って、いささかだけ意匠でまとめられており、窮屈さを感じさせず、また見どころの多い玄関である。

舞良戸を開けると三畳の玄関の間である。東側正面では、南寄り半間のところに柱をたて、左よりの一間分を開口とし襖を立て、残りの間半を壁床にして客を迎える。壁床は上部の壁面にわずかに曲がりのある竹を渡しただけの、簡略化された織部床の形式である。開口には市松模様の襖を建てる。

玄関三畳の奥の奥に次の間八畳と主室八畳がつづき、その北側には半間巾の中廊下をはさんで居間、次の間、内玄関が配されている。内玄関の西には配膳室と炊事場がある。

主室と次の間の二部屋はともに八畳の広さで、境に襖をたてただけの連続した性格をもつ座敷であり、天井高も7尺9寸8分(2.42メートル)で統一され、内法高もともに5尺7寸(1.73メートル)で共通しているが、意匠は全く性格を異にしている。

主室は、北面中央に見付4寸2分(13センチメートル)の床柱(霧島杉)を立てた一間床を構え、床脇に違い棚と天袋および地袋をしつらえる。床框は黒漆の真塗りで、落掛は桐。床の間の右手には矩折に付書院を設ける。繊細な組子の障子が4枚建

ち、欄間に透かしを入れた桐板を嵌めている。天井は傘縁天井。柱は3寸8分(12センチメートル)の桧の角柱で内法に成3寸2分(9.7センチメートル)の長押をまわす。桐の落掛け付書院まわりなどに数寄を凝らした意匠もみられるが、柱は桧の良材で統一されており、基本的には書院造の格調を感じさせる座敷である。

一方の次の間の場合、北面に床の間を構えるのは主室と共通しているが、曲がりの目立つ皮付きの自然木(杉か桧の変木)を床柱に立てた間口4尺3寸(1.3メートル)ほどの床の間で、相手柱には天然の紋り丸太を立てている。落掛には長年風雨に曝された真竹を渡す。床框は無く、ハツリを施した蹴込板の上に厚さ1寸2分(3.6センチメートル)の床(とこ)板を載せた蹴込床の形式である。奥行きは非常に浅くて、1尺4寸(42センチメートル)に満たないが、奥の左右の入隅を、柱を見せずに壁を塗りまわしていることから、実際以上の奥深さが感じられる。床の間の右脇は板を敷いて奥行きをつくり、ナグリを施した壁留を渡す。その向うには両肩に木瓜形をかたどった木杵をつくって襖を建て、居間や配膳室に通じている。また、床の間の左脇は中敷居を入れた上下二段の押し入れで、上段に襖、下段には網代を煤竹で押さえた引き違い戸を建てている。天井は、主室と同じ竿縁天井の形式であるが、主室の竿が削った角材であるのに対して、次の間の竿は下端に丸みをつけて表情を和らげている。柱は3寸5分(11センチメートル)程度の皮付きの丸太を立て、要所にハツリを施して景を添えている。内法に長押はない。

以上のように、丸太を主体に用い、長押を省いて竿縁に丸みを付けるなど、次の間の竿は下端に丸みをつけて表情を和らげている。柱は3寸5分(11センチメートル)程度の皮付きの丸太を立て、要所にハツリを施して景をそえている。内法に長押はない。次の間には明らかに主室と異なる手法が展開されている。すなわち、主室が書院造を基調にしたつくりであるのに対して、次の間は数寄屋の手法に徹してつくられており、主室とは異なる自由な遊び心が感じられる。自然のままの表情を持つ材を主に扱って素朴な手法や材を積極的に採り入れた表現は草庵の風情にも通じている。粗朴であることを旨とするために、かえって入念で手の込んだ、高度な技が要求される仕事でもある。

このような、主室と次の間の根本的な表現の違いは、座敷に付属する縁の有り様にも端的に表れている。

主室には東から南にかけて、矩折りに縁がまわっている。巾は半間よりやや広い。東の縁からそのまま庭に下りられるが、深く軒を差し出した南側は、建物が池の上に張り出すようにつくられており、縁の下は池になっていることから、縁先に1尺6寸(48センチメートル)の高さの高欄が立つ。現在は高欄の外にガラス戸が建っているが、ガラス戸と高欄の間に一筋の敷居・鴨居があって雨戸が建つようになっている。ガラス戸と高欄の間に一筋の敷居・鴨居があって雨戸が建つようになっている。ガラス戸の敷・鴨居はあとから取り付けられた形跡もあることから、本来はガラス戸がなく(昭和初期の後補)、縁先は高欄が建つだけで庭に開放されていたことがわかる。落下防止の手摺りでもあるが、時に高欄にもたれて縁にたたずみ、池越しに東山や鴨川の流れを眺める風情を楽しむ工夫でもあったものと解される。

一方で、御殿の建築や書院造といった格式のある建築では、座敷に縁が付属するのが原則であり、縁は座敷への通路であるのと同時に座敷よりの格下の者が座す場所でもあった。また、縁先の高欄は宮殿建築に通例的にみられる装置であり、高貴な建築のシンボルでもある。主室の縁は、建築に居ながらにして庭や景色を楽しむための情緒的な仕掛けであるのと同時に、主室のいっそう格調を高めている。

次の間の南にはスリガラス縁付き透明ガラスをあしらった明かり障子が建つ。腰付きの障子であるが、腰の高さは8寸4分(25センチメートル)と低く、ノネ板を網代にして張っている。障子戸を開けると8寸下がりに落ち縁があり、その下に瓦が四半に敷かれている。この落ち縁を踏み台として、次の間と庭との間で直接上がり下りできるようになっている。落ち縁は正式な玄関の式台のような板敷ではなく、節付きの小丸太を低い位置に打ち並べたものである。四半の瓦からは1尺(30センチメートル)の高さしかない。すなわち、次の間では座敷に付属する縁を省略し、その代わりにここでは軒の下まで庭の四半瓦敷を擬した土間庇が侵入してきて座敷と庭とが直結している。

かつて、御殿の茶から決別して詫び茶に相応しい草庵茶室が創始されるに際し、高貴な座敷の原則であった縁を解体して土間庇を形成し、座敷の直前にまで庭を侵入させて沓脱石を据え、庭から直接座敷に上がる形式が試みられた。次の間のこの軒下の構成は、このような草庵の座敷にも通じる構えであり、より徹底した数寄屋への志向が感じられる。

ちなみに、この軒下にそなわる戸袋、主室の雨戸を収納するもので、次の間への採光や出入りの妨げにならないように、回転させて軒下に収まるように工夫されている。間口のせまい町屋の縁先などによく試みられる工夫でもある。

明治・大正期の近代住宅の特徴でもある中廊下を挟んで、北寄りには居間と内玄関があり、北西の一角に炊事場と配膳室がある。炊事場は、以前は土間であったのであろうか。井戸も残されており、当初から使われ続けてきた配膳台も見逃せない。

離れ

木造平屋建、棧瓦葺の寄棟造で、東に突出した部分のみ入母屋造りとする。

主室八畳と次の間六畳からなり、主室の東に板敷きの洋室が付属する。ここが東に突出した入母屋造の部分にあたる。玄関の脇に便所があり、次の間の西には台所がある。

主室八畳では南に床の間を構え、床脇は地袋と棚をそなえる。床柱は目通り3寸2分(9.7センチメートル)ほどの赤松皮付。床脇の棚は吊り木がなく、壁だけで支持された一枚板の棚である。筆返しを省略するかわりに、板の端をわずかに反らしている。酒脱で繊細なデザインである。(※主室の床の間構えは近年改造された。)

主室と次の間とがともに北を向き、縁を介して穏やかな明かりが採り入れられているのに対して、東の突出した洋室は南と東に開口がとられ、極めて明るく開放的である。主室、次の間との陰影のコントラストが際立っている。洋室の床は一面に樽板を張る。北面の中央に壁を後退させて床の間に似た構えをつくっているが、通常の床の間とは異なり、下に地袋を備えている。東面も中敷居を渡した腰窓があき、北寄りの一部に地袋がそなわる。ここが洋間のしつらえであり、椅子座として使用されることに対応した構えである。

なお、東に突出した洋間まわりには棚や内法まわりに改造の痕跡が多く見受けられることから、幾度かの変遷を経て現在のような形が伝わっていることが予想される。

茶室および腰掛待合

木造平屋建て、切妻造棧瓦葺で大屋根の軒先と庇を銅板で葺く。南に開く躡口（にじりぐち）の側に深い土間庇を形成し、躡口と矩折りに南向きに貴人口を開ける。貴人口の側は躡口の深い庇がそのまま回り込んで切妻屋根となっている。大屋根の下にいくつかの庇を重ねて全体の軒先を低く抑えた、草庵茶室に相応しい落ち着いた外観を見せている。貴人口の脇には力竹を立てた丸窓をあけて風情を添える。東から北面にかけては柱間の下方に竹を渡して壁留にし、下部を開放する。壁留め竹の下に庭の池流れが入り込み、池をまたぐように茶室が建つ。山間の清流に茶屋を建てかけた風情である。

茶室は客座四畳半と一畳の点前座からなる五畳半で、背後に水屋が付属する。客座と前座の境に中柱を立てた台目構えを形成しており、侘び茶の茶室の構えをなしている。点前座が台目の畳ではなく丸一畳を敷いているので、炉は上げ台目切となる。

西面に床の間を構える。下座床の形式になる。間口4尺6寸（1.4メートル）で、いわゆる台目床である。赤松皮付の床柱に入節の框を組み合わせ、相手柱には節目も大きく野趣に富んだ档丸太をたてる。床の間と並ぶ北寄りの壁面に給仕口と茶道口が開く。ふたつの通い口の間に広くやや間のびして見えるのは、床脇の壁が点前座まで入り込んで一間半もあるからである。給仕口は塗り回しの花頭口、茶道口は方立口の形式である。客の入り口である躡口は東面に開き、それと矩折りに南に貴人口が設けられている。躡口が部屋の隅ではなく東の壁の中央寄りにあいているのが注目される。壁の中程に躡口をあけるのは遠州が好んだ形式でもある。壁の中央に開けることによって、客の動線を二方向に確保し、正客と相伴の座を自ずと分ける工夫である。ここでも、躡口に入って左方にむかうと床前に至り、右方に進むと点前座に向かう。躡口の左手に貴人口を開けているのも道理に適った構成である。

点前座は客座の北にある。境に立つ中柱は大きく湾曲した赤松皮付で、畳から2尺2寸3分（67.6センチメートル）の高さに横竹を入れて、下を吹き抜く。点前座の風炉先には下地窓（風炉先窓）をあげ、勝手付にも下地窓を二箇所開けている。勝手付の下地窓は上下に中心を少しずらしてあけた色紙窓の形式である。吉田織部が好んだ窓の形式である。風炉先に二重棚を仕付ける。但し吊り木はない。

客座の天井は、床前を竿縁天井の平天井とし、躡口寄りの半間は掛込天井の化粧屋根裏とする。竿縁天井と掛込天井の境に壁留の丸太を渡して垂れ壁をつくっているのは、古典にはなく、近代の茶室に時折みられる手法である。平天井の高さを確保するための工夫であろうか。点前座は蒲の落ち天井とし、竿縁に竹を二本打ち上げている。

茶室の西に板張りの水屋がある。茶室に通う茶道口と給仕口に建つ太鼓襖がそれぞれ左右逆方向に引き込まれることから、そのままと引き尻が足りなく不都合を生じる。そこで茶道口の下を薄くして、引き尻が当たらないように工夫されている。

茶室の東に切妻造銅板葺の腰掛待合がある。東に雪隠を付属した奥行き深い腰掛であるが、東の袖壁は上方を吹き放し、西には下地窓をあけて解放感をもたせている。内部は奥の半間分のところに腰掛を設け、東寄りを正客の座として少しふくらみのある正客石を据えている。軽快な屋根裏に曲がりのある張りが中央に渡されている。

洋館と二階家

洋館に関しては、確かな資料は見当たらないが、伝聞によると、旧所有者であった塚本氏が昭和の初期に建てたもので、欧州帰りの友人などを招くための施設であったとされる。離れの東側に、かつて合歓亭と呼ばれた二階建の建物があった。谷崎潤一郎が建てたと考えられる興味深い建物であったが、平成2年に取り壊され、現在は空き地になっている。（京都工芸繊維大学日本建築史研究室で復元模型が作製され、その写真が展示されている）

2、庭園の構成と意匠

主屋の南に庭園がひろがる。茶室および腰掛待合との間に池を穿ち、腰掛待合より東方は土を盛り上げて築山をつくる。全体に回遊式の庭園の形態をとり、茶室および腰掛待合の周辺は四ツ目垣で区画して路地風のつくりになる。

池は主屋主室の縁の真下まで迫っており、護岸は縁の下まで入り込んでいる。すなわち縁が池に張り出したような形態である。縁の庇先には野木瓜（ムベ）棚が張り出し池を覆っている。主屋玄関に向かう延段の脇に据えられた白石を転用した大きな飛石から右に折れ、石段を数段下ると池の護岸に達する。主屋が建つ地面に対して1.8メートルほどの低い位置に池の水面がある。庭園の水位を低く設定しているのは賀茂川、あるいは泉川の水位と関連しているのかもしれない。石段をおりたところから対岸に渡る土橋が架かる。

対岸にわたり石段を上がると園路は左右にわかれ、左は築山へ、右は茶室前の露地へと導かれる。池を渡る橋は、茶室の北にもう一箇所ある。こちらは二本の切石を遣り違いに並べた石橋である。茶室の床は池に大きく張り出し、池の護岸として据えられた自然石を根石にして柱を立てている。茶室の床下は青石やチャートによる荒々しい石組である。石橋を渡ると小さな露地門があり、腰掛待合と茶室がある。露地門の脇に据えられた手水鉢は緑色凝灰岩で、明治40年（1907）に国鉄西院線が日本海まで開通してから後、京都に盛んに持ち込まれた海石である。手水鉢の近くに朝鮮物の石灯籠が立つ。腰掛待合の周辺には守山石が多く据えられている。腰掛待合脇に溶解した石灰岩の奇岩がすわる。太湖石に似た景石である。その手前には三重の宮灯籠（宮立形灯籠）が立つ。

庭園の南東部のいちばん奥まったところに善道寺型の灯籠が立っている。中京区河原町二条の善道寺にある灯籠を本歌とする灯籠で、特に近代になって数寄者たちに好まれた灯籠である。さらに奥に進むと湧き井筒がある。井筒から湧き出た水は、しばらく溪流となって築山を下り、やがて1メートルほどの滝を落ちる。力強い滝石組は大振りの自然石で組まれており、貴船石ほか守山石などが使用されている。滝を落ちた流れは、主屋主室の手前で広い池に注がれる。滝前から主屋の縁下にかけて、池中に踏み石を配して沢飛をつくっている。園路はそこから主屋の前面を通して玄関にいたる。

もうひとつ、池の東方を通るルートがある。主屋の東北に向かって飛石が打たれている。主屋の東軒下には創作の円筒形石造手水鉢を据え、縁先の意匠を整えている。そこから左に大きく湾曲する延段は浄土寺のゴロタ（白川石）を打ち並べた縁段である。何気ない延段であるが、格式ばらない巧みな仕事である。

池が大きく掘り込まれ、さらに南方に築山が築かれるなど、起伏が大きくダイナミックな印象の強い庭園である。近代に流行した石やデザインを随所にみることができる。鞍馬や守山石を多く採り入れ、護岸には南郷の虎石を要所に配するなど、京都や滋賀の石を多く用いている。全体に、明治末から大正のころにかけての時代の表現が見受けられる。

3、造営時期と沿革

谷崎潤一郎がここに居を構えたのは昭和24年(1949)4月であった。離れの書斎は移築後谷垣が増築したものであると伝えられる。そのとき主屋や茶室はすでに建っており、それぞれ明治40年(1907)ころに建設されたものであるという伝承はあるが、石村亭の建物の造営の経緯を伝える確かな資料はない。

法務局の土地台帳(登記簿)によると、現在の石村亭が立地する主要部にあたる「下鴨泉川5番」の地は、明治40年(1907)9月25日に北大路静夫なる人物から上京区二条通寺町の榎本本町に住む塚本儀助に所有権が移転している。その後、昭和22年(1947)塚本純一に家督相続、同24年(1949)には谷崎松子に売却されていることがわかる。そして同31年(1956)に現在の日新電機株式会社に所有権が移転され、現在に至っている。また、周辺の土地も明治40年代から大正初期にかけて塚本儀助の所有するところとなっている。

主屋の主室小屋裏には棟札などの記録はみあらたらないが、小さな祈禱札が棟東に打ち付けられており、それには「塚本儀助」の名が明記されている。

以上から、主屋の建物が塚本儀助によって建設されたもので、それは明治40年か、あるいはそれをあまりくだらない時期のことであったことが想像される。

塚本儀助の曾孫にあたる塚本一雄氏は、建物の上棟時に奉獻したと思われる幣串を4本保管されている。いずれも塚本家の本家(京都市寺町二条)の土蔵を解体した時に、土蔵から出てきたものであり、塚本家の家屋造営に関する幣束である。それら4本の幣串にはそれぞれ次のような墨書が確認できる。

- ① (第一面) 上棟 高島甚之助 塚本儀助 明治四十二年三月吉祥日
(第二面) 棟梁 山口政治郎 手傳方 関市三郎 左官 菅原口助
- ② (第一面) 上棟 明治四十四年十一月九日 塚本箒之助
(第二面) 大工棟梁 田中梅次郎 手傳方 宮嶋安之助
- ③ (第一面) 明治十九年三月 塚本義助
(第二面) 記載なし
- ④ (第一面) 明治四十三年四月吉祥大安日 大工棟梁 田中梅次郎 手傳方 宮崎安次郎
(第二面) 上棟 施主 塚本儀助

以上のうち、①は施主が連名になっており、どこかにあった借家の造営に関するものと想像される。②もどこにあった幣串かわからないが、「大工棟梁」となっている「田中梅次郎」は塚本家出入りの大工であったといい、「手傳方」に挙がっている「宮嶋安之助」も出入りの大工であった可能性がある。「塚本箒乃助」は儀助の弟である塚本藤吉(1871-1905)の子息であると伝えられる。そうすると明治44年当時、若い施主であったことになる。③は4本の幣串の中で最も古い年紀をもつものである。人名としては施主のみが記載されている。本家の造営に関わるものかもしれない。

塚本家には、現・石村亭主屋の建築は明治40年(1912)ころ竣工したものであり、大工棟梁は出入りの「梅さん」こと「田中梅次郎」であったと伝えられている。したがって以上4本のうち、石村亭主屋のものと推定される幣束は②と④になる。さらに施主が塚本儀助であったことを勘案すれば、④が最も可能性が高いといえよう。

一雄氏作成の家系図によりますと、現石村亭を建てた塚本儀助(義助・栄三郎)は塚本義翁(義助 1834-1909)と妻・しげ(1826-1907)の長男として慶応2年(1866)に生まれた。八木家から嫁いだ妻・てるとの間に四男をもうけ、昭和19年(1944)に没している。儀翁の先代・籙兵衛(1869没)およびその先代・久左衛門(1851没)は現在の三重県羽津であるという。儀助には弟に籙吉と靖がいた。ちなみに靖(巳ノ吉 1872-1937)は東京帝国大学造家学科を卒業後、同教授となり、建築学会(現在の日本建築学会)会長をつとめるなどした建築会の重鎮である。昭和3年に行われた昭和天皇の大礼に際し東大教授であった塚本靖は参列のため「下鴨泉川の塚本邸」を宿泊所に定めていた。

儀助は主に朝鮮との間での扇子などの商いによって財をなし、下鴨の地に邸宅を建てたとされる。先代・義翁の隠居所として建てたのであるが、儀翁は完成前に没し(1909)、ここに住むことはなかったというから、建設の計画あるいは工事は1909年以前に始まっていた。邸宅の完成が明治45年(1912)ころとすると計画から3年以上の年月を経て完成していることになる。そのとき儀助は45歳前後であった。朝鮮燈籠など、現在の石村亭庭園内にいくつか見られる朝鮮物の石造品などは、儀助が商売での往来時に手に入れたものが置かれ残されたものかもしれない。

明治の前半まで、現在の石村亭の地は一面の竹藪であった。そこを戸田某が開懇をはじめ、土地の分割販売をしたのという。儀助がたてた下鴨の邸宅は、はじめ「東林菴」と呼ばれていた。谷崎潤一郎がこの地を手に入れたときも「東林菴」であった。それを谷崎が「後の扇庵亭」と名づけ、さらに日新電機株式会社に譲るときに石村亭と命名し現在にいたっている。

塚本家には「東林菴」と墨書きされた表札が残されている。かつて塚本家の時代に入りの門にかかっていた表札であるという。側面に「大正 盛春 鶴洞、裏面には「大正十二年頃鶴洞なる書家に願作之」と墨書きされており、この「東林菴」の文字が「鶴洞」と号す書家によって揮毫されたものであることがわかる。近代に活躍した書家に松尾鶴洞(1871-193?)がいる。長崎の人で、名を周、字は継甫、号を鶴洞と称して、主に京都で活躍した書家であるという。表札の「鶴洞」がこの松尾鶴洞であったかどうかは詳らかでないが、いずれにしても塚本儀助は懇意の書家「鶴洞」に自らが好み建てた邸宅の表札に揮毫してもらったのであろう。

先に見た上棟の時の幣串のうち、石村亭主屋のものである可能性が最も高い幣束④によれば上棟は明治43年(1910)4月であった。また幣束②が伝える建物の上棟は明治44年(1911)11月である。1年半ほどの間に塚本儀助と塚本箒之助が相次いで二棟の建物を上棟させていることになる。塚本家の活気が感じられる。石村亭主屋も塚本家の経済的繁栄を背景に営まれたのであ

ろう。近代数寄屋の名邸の名に恥じない良材の扱いと確かな技術が認められるのもその証である。

大工棟梁・田中梅次郎は、「梅さん」と呼ばれた塚本家出入りの大工棟梁であった。おそらく町屋を多く手がける大工であったと想像されるが、丸太や銘木もこなす数寄屋大工としての技量を持ちあわせており、しかも名工の域に達した優れた工匠であったことにもなる。

幣束④に「手傳方 宮崎安次郎」の名がみえる。棟梁である田中梅次郎のもとで工事をたすけていたのであろう。京都の南禅寺福地町に流響院(旧織寶苑)という数寄の名邸がある。南禅寺界隈の別荘地開発に取り組んだ塚本與三次が明治42年(1909)ころから営んだ邸宅である。大正14年(1925)には分割されて東部は下郷伝平、西部は岩崎小彌太の所有するところとなった。塚本邸の西部を取得した岩崎はさっそく建物増築と三輪の整備を行った。かつての塚本邸仏間の北方に増築された座敷の屋根裏に次のように墨書された幣串がのこされている。

(第一面) 宇時 大正十五年 四月廿六日

(第二面) 奉上棟 施主 岩崎 工事監督 田島彌太郎 棟梁 谷口鶴藏
肝煎 青木青
基梁 宮崎安次郎

「基梁」なることばが如何なる役割を示す語であるのかはわからないが、数寄の名邸が建ち並ぶ京都南禅寺界隈の別邸群の中でも特筆される流響院の仕事に宮崎安次郎の名が残されていることは注目されよう。これが幣束④の「宮崎安次郎」と同一人物であったとすれば、彼もまた石村亭建設当時は数寄の名工としての名を挙げつつあった人物で、岩崎邸増築においては「基梁」としての責任を果たすにいたったことが想像される。

庭内に建つ茶室は主屋より後に造られたと伝えられる。明治の末から大正の初期にかけてのころ(昭和という伝えもある)であったという。大工は「平井某」であったと伝えられている。茶室を得意とした数寄屋大工に平井儀助や平井竹次郎を輩出した{平井家}があるが、ここの茶室を造った大工・平井は、主屋の大工棟梁・田中梅次郎の弟子にあたる大工であったようである。その住まいは新榎木町丸太町にあったといわれ、田中梅次郎がご祝儀として平井に造らせたものであるという。

離れの書齋は、大正のころ、どこからか移築をしてきたものを借家として使用していたもので、一雄氏の叔父にあたる昌巳さんが住んでいたと伝えられる。屋根裏からは、明治10年代の墨書が確認されている。谷崎の所有になってからそれを改築し書齋とした。東に突出した洋室も改築に合わせて増築したものであるということである。

3、まとめ — 伝えられた建築の文化的価値

石村亭の主屋は、明治43年に上棟した可能性が高い、いわゆる近代の和風建築である。明治後期から昭和戦前期は、数寄屋大工の技術が高まり、良材が多く流通した時代であり、特に質の高い数寄屋建築が多くつくられた時期である。石村亭主屋も良材を用い、高い技術をもってつくられた、きわめて良質な数寄屋普請であるといえよう。上棟の時のものと思われる幣串が発見され、生産に関わった工匠が明らかになったことも、近代の数寄屋大工の技術的系譜や人脈を解明する上で、意義が大きい。

南に接客などのハレの座敷を配し、北方に居間や内玄関といった私的な性格の場所を配する構成は、伝統的な日本のすまいの構成に則ったものであるが、ハレの部分と私的な部分の境に中廊下をとりいれているのは、近代の住宅建築として際立った特徴である。京都の大規模な町屋などでも、このような中廊下が明治末ころから採用されはじめる。石村亭主屋も日本のすまいに中廊下が採り入れられた初期の事例のひとつであり、実生活の機能性に考慮した構成となっている。近代の数寄屋建築の新しい試みとして評価されよう。

主室が書院造を基調とした格式の高い形式になっているのに対して、次の間は草庵茶室にも通じる数寄屋造の意匠からなっている。書院造と数寄屋の意匠を違和感なく共存させている技量は見事である。手がけた大工は伝統的な様式に対する高い理解と技量を持ち合わせた工匠であったことが伺える。

茶室には、池の上に張り出すように建てられるなど、斬新な技が試みられている。四畳半に一畳の点前座を付加させることで、小間にも広間にも適う、近代の茶の湯に相応しい平面構成が見られる。

離れの建築は移築され、改造されることで、書齋としての機能性を高めながら使い続けられている。落ち着いた和風の座敷と明るく開放的な洋室のコントラストも興味深い。

石村亭の西を流れる泉川は京都市左京区の岩倉に発し、松ヶ崎を西流した後に南下し、下鴨神社の境内をぬけて高野川に注ぐ。瀬見の小川の古名を有するなど、古来、沿岸の人びとの生活と密接な関係をもつてながれていた川であり、また、下鴨神社とその摂社・河合神社の社叢である糺の森における重要な景観要素として位置づけられてきた小川である。泉川の水位と密接な関係を持ち、泉川からの導水によって成立していた可能性もある石村亭の庭園も、下鴨神社の自然環境を反映しながら周辺の良い景観を形成する重要な要素であるといえる。下鴨神社周辺の庭園文化を考える上でも興味深い事例である。

石村亭の建築は、文豪・谷崎潤一郎が昭和24年から8年弱を過ごした邸宅であった。多くの邸を構えた谷崎にとっては比較的長い期間すまいとして使用された邸であった。かつて日本の家屋における陰影の存在と日本人の美意識に関して西洋のそれらと比較論じた『陰影礼讃』(昭和8年12月・同9年1月「経済往来」に連載)を著した谷崎の独特の美意識にも適う建築であったのかもしれない。そのような谷崎潤一郎の旧邸であったという事実と相俟って、健康的、文化的価値が増幅されいっそうたかめられていることはいうまでもない。そのような建築が、改修の手を加えながら形を変えることもなく現在に継承されていることの意義は大きい。

参考文献

※京都工芸繊維大学工芸学研究所 日本建築史研究室

『谷崎潤一郎旧邸・石村亭の文化的価値に関する調査研究』(2007年)より抜粋

(写真・編集 近畿支部 河島 博)